

「教えられる」学びから「気づく」学びへ

—感性に働きかけることはなぜ学生のところに響くか—

学医（精神科医）人間科学部教授 小林 隆 児

昨年だったか、本学でも教員向けに行われた研修会で「アクティヴ・ラーニング」が取り上げられた。今では「主体的・対話的で深い学び」と改められたが、これは参加者に課題を出して議論すれば事足りるようなものではない。教員はこのことにどれだけ自覚的であろうかと思う。

学部や大学院教育ではもちろんであるが、この数年、私はリカレント講座や西南学院講座 in Tokyo で社会人向けにも「感性教育」を試みてきた。そこで気づかされたことは多々あるが、もっとも強烈に印象付けられたのは、社会人として数十年もキャリアを積んだ専門職にかぎって、いかに先入観をもって人を観察しているかということである。私が実践している「感性教育」は、乳幼児と母親との交流場면을録画したビデオ記録を供覧し、それを見てこの母子関係をどう捉えたらよいか、自由に感じたことを発言し合いながら学ぶという、いたって単純な方法である。私が「感性教育」を思い立ったのは、あまりにも理性にばかり働きかける教育が横行している現状を知り、対人援助技術を学ぶ学生への教育がこれでよいのかという私なりの危機感からであった。

実施し始めた頃は私も大変な思いをした。学生に発言を求めると、見るからに嫌そうな顔を見せて、すぐにとりに助けを求めようとする。しばらくして、受験教育で学生は正しいことを言わなければならないという習慣が身につき、ただ感じたことを率直に発言することなど、経験したことがほとんどないことに気づかされた。この習性は恐ろしいほどに強い。これをいかに壊していくか、それが私の当面の課題となった。回を積み重ねていくにつれ、学生も自分の思いをみんなに受け止めてもらうという初めての体験に喜びを表明するものも現れた。こうして、入学時から4年間、このような試みを積み重ねていくと、確かな手応えを感じ取れるようになった。

「主体的・対話的で深い学び」を遂行するには、教員にもかなり高度な技術を要請する。学生のつぶやきやさり気ない発言を丁寧に掬い取りながら、そこに込められた思いや心の動きを教員は察知して引き出してやる必要があるからである。学生自身の発言に込められた意味、そこに働いている背景などへと対話が発展していくことが肝要である。

義務教育で道徳が必修化され、現場で混乱が少なからず生まれていると聞く。従来の正解を導き出すことが教育と信じて疑わなかった教師が戸惑うのは至極当然である。では本学の教育の現状はいかなるものであろうか。

つい先日行ったリカレント講座に、たまたま本学部の女子学生が参加していた。彼女が終了後のアンケートに感想を述べていた。「実践で他の方の話を聞いて新しい視点が学べた。これを通じて『教えられた』というよりも『気づいた』最高の講座だった」という。

外から何かを教えられる体験は「アクティヴ・ラーニング」ではない。自らの内面に働きかけられることによって新たな気づきが生まれる。これこそ「主体的・対話的で深い学び」の真髄だと私は考えているからである。